

笑いの探究

—*Pride and Prejudice* にみる—

中野喜美子

序

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」¹⁾と夏目漱石も言っているように、科学が進歩し、宇宙時代となっても人間関係は煩わしいものである。緊張した対人関係により神経の疲れた現代人にとってもっとユーモアとか、笑いが必要なのではないだろうか。

笑いを与えるものには小説がある。小説とは特定の読者を相手に教える目的であるのか、あるいは多数の読者層を相手に楽しませるためにあるものか、いろいろ議論されるところである。しかし小説の勃興が王侯将相を **hero** とする **romance** から Daniel Defoe による *Robinson Crusoe* のように社会的地位の低い平凡人が小説の主人公となった **novel** へと発生したことなどを考えるならば、小説はできるだけ多くの読者を対象とするものである方が望ましいのである。

Jane Austen の小説はどこにでもありふれた平凡な日常生活の事柄、感情、事件をとり扱っているにもかかわらず、多数の読者を楽しませてくれるのである。その秘密はどこにあるのか、*Pride and Prejudice* の笑いを探ってみることによってその面白さをみてみよう。

(1)

しかしながら作品の中に数多くの笑いが満ちているとしても作品全体とし

1) 夏目漱石、「草枕」(「漱石全集」, 第2巻, 岩波書店, 昭和41年), p. 387.

て読者を最後まで惹きつける魅力がなければその作品の中に笑いを見つけることはできないと思われる。

Jane Austen の小説を読んでも新聞の連載小説や連続テレビドラマと通じる一面がある。連載小説やテレビドラマは一日毎に終り大衆が好まなければ途中で止めて別の方面を見てもよいし、次回は見なくてもよいのである。しかし面白い番組であると、つまらない事柄を題材としていても次回も見なくなり、最後まで見てしまうのである。**Jane Austen** の小説の場合にも共通な面がある。それは題材が平凡な事柄で大衆に親しみやすく、小説が各章ごとに分れていることである。読者がその章で読みたくなければそのまま放っておいても良いのである。しかし平凡な日常茶飯事の、一見つまらないように思える事柄であるのに早く次の章を読みたくなるのである。つまらないと思いつつながら、最後まで続けて読んでしまう、これは **Jane Austen** が読者を最後まで惹きつけ、楽しませる方法を身につけていたからである。その方法について考察してみよう。

- (a) 題材が私達の身近の平凡な日常ありふれた人物、事件、事柄であること。
- (b) 起承転結が各章ごとにあること。

読者はその章だけでひとつの短編小説を読んだような気持ちになる。

(c) 各章を通して最後まで一貫したテーマがあること。各章毎に起承転結で終わってしまうのでは読者の興味は消えてしまう。読者の興味を最後まで引っばってゆく一貫したテーマが必要である。*Pride and Prejudice* では **Darcy** の **pride**, **Elizabeth** の **prejudice** が読者の興味を最後までひきつけていくのである。

- (d) 好奇心をそそること。

detective story と通じるが、作品の至るところに謎を散りばめ、読者に謎解きの興味を与えている。

- (e) 女性を主人公にし、活躍させること。

Jane Austen は女性であることをよくわきまえていた。¹⁾しかし喜劇を作る

1) Cf., 拙稿, 真実の探究「甲南女子大学英文学研究」, 第4号 昭和42年12月。

ためには女性がペールを被って隠れていたのでは喜劇が生れない。¹⁾そのためには女性が男性と同等に活躍しなければ喜劇はできない。その女性とは教養のある頭の良い、男性に匹敵しうる婦人でなければならない。Shakespeare の作品では *As You Like It* の Rosalind, *The Merchant of Venice* の Portia, *Twelfth Night* の Maria 等、女性が活躍するところに喜劇の面白さがある。Jane Austen の *Pride and Prejudice* では Elizabeth を活躍させることによって喜劇を作っているのである。

(f) Dramatic Mode を用いること。

人物の Dialogue を中心に小説が進行してゆく。Reuben A. Brower は「Jane Austen は James 流に同じ行動にさまざまな解釈の可能性の意味を伝えている。」²⁾と述べているが、彼女の作品の登場人物の会話は日常茶飯事のありふれたものであるけれどもそこにさまざまな多様性があり、読者の想像力によってどのようにも解釈できる。Jane Austen の小説の人物の会話が誇張に感じられるのは Drama において会話を誇張することによって虚構を真実らしく見せようとする方法と通じるものがある。

(2)

それでは *Pride and Prejudice* の笑いとはどのようなものであるか考察していこう。

笑いと言っても種々さまざまであるがその中に他人を傷つける笑いがある。他人を傷つける笑いとは「友達の不幸、失敗、欠点、不遇をみて、意識的、無意識に、私達の現在の状態と比較して優越感を感じ、嘲笑的に笑うのである。」³⁾この作品では⁴⁾ Vol. 1. Chapter 8 で風邪をひいて寝こんでいる Jane

1) Cf., George Meredith, *An Essay on Comedy* (Mickleham Ed.), p. 59.

2) Reuben A. Brower, "The Controlling Hand; Jane Austen and *Pride and Prejudice*", *Scrutiny* Vol. XIII, No. 2. (September 1945), p. 99.

3) Cf., Harold Nicolson, *The English Sense of Humour and Other Essays*, pp. 10—11 (London, 1956.)

4) Jane Austen, *Pride and Prejudice*, ed. R. W. Chapman. (Oxford Univ. P., 1965.) Text はこれを使用し、以後頁数のみ示す。

のところに Elizabeth が泥だらけになって駆けつけた時、Elizabeth の petticoat が ‘six inches deep in mud’ (p. 36.) であったのを Miss Bingley が見て笑っている。しかしながら Jane Austen の笑いとは、このように人の苦境をみて笑う嘲笑的な笑いではない。作者は Elizabeth に次のように言わせている。

“...I hope I never ridicule what is wise or good. Follies and nonsense, whims and inconsistencies do divert me, I own, and I laugh at them whenever I can. — But these, I suppose, are precisely what you are without.” (p. 57.)

Jane Austen の笑いとは他人を傷つける ridiculous な笑いを離れて人間の行動の folly や、偽善と真実とのくい違い等による人間の弱さを笑う笑いである。それゆえ、彼女の笑いは ‘spontaneous laughter’¹⁾ ではなく、‘reflective laughter’²⁾ である。‘reflective laughter’ の中で Jane Austen の作品には wit と irony が多く含まれている。彼女は平凡な日常の会話や人物の行動の中に鋭い感受性でもって矛盾やくい違いによる滑稽味を見出し、私達を笑わせてくれるのである。

それでは次に Elizabeth の性格がどうして笑いを見つけ出すのにふさわしいのであろうか。Mr. Bennet は5人の娘の中で Elizabeth を一番気に入っている。彼女については ‘quickness of mind’, ‘liveliness of mind’ という言葉で表現され、頭の鋭い彼女は wit に富んでいて、平凡な事物、事件、会話等から笑いを見つけ出す能力がある。それゆえ、彼女の現れるところには生々とした、明るい笑いがおこるのである。Elizabeth は wit をそのまま代表する人物と言ってもよいであろう。

一方、Mr. Bennet は ‘mixture of quick parts, sarcastic humour, re-

1) Harold Nicolson, op. cit., p. 26.

‘spontaneous laughter’ とは本能的、根源的、自然力の楽しみの感情から生じる笑いである。

2) “reflective laughter” とは非常に精神的、知的活動を必要とする笑いである。

serve, and caprice' と表現されている。彼は妻の美貌にひかれて結婚したが、その情熱も消え失せ、思慮分別のない妻を自分のところまで高めようとする努力もせず、夫婦の間に真の対話は途絶えていた。彼は田舎で書斎にひきこもって、もっぱら読書に耽けり、世をすねた風刺家である。彼は *As You Like It* の Jaques と似たところがある。しかし財産が限定相続されているのに、5人も娘がありながら、まるで経済観念のないところは George Meredith の General Ople に似たところがある。しかし彼の irony は Elizabeth の wit とうまくかみ合って笑いを醸し出している。彼の笑いとは "...For what do we live, but to make sport for our neighbours, and laugh at them in our turn?" (p. 364.) と述べられている。彼は隣人の愚行、勿体ぶりを種に笑いを見出ししている。しかし Lydia の墮落の時は逆に隣人から笑われることになるから皮肉なものである。この作品では Elizabeth, Mr. Bennet の他にも種々さまざまな登場人物の動きによって笑いが生れている。

(3)

それではこの作品の登場人物はどのような type に分かれ、笑いが生じるのであろうか。Marvin Mudrick は二つの type に分けている。¹⁾それは simple characters²⁾ と complex (intricate) characters³⁾ とである。simple characters には Mrs. Bennet, Lydia, Mr. Collins, Lady Catherine, Jane, Bingley 等が含まれ、complex characters には、Charlotte, Wickham, Mr. Bennet, Darcy, Elizabeth 等が含まれている。simple characters と complex characters とが恋愛、結婚を通じて絡み合うところに笑いがおこ

- 1) Cf., Marvin Mudrick, "Irony as Discrimination, *Pride and Prejudice*", *Jane Austen, Irony as Defense and Discovery*, (Princeton Univ., 1952)
- 2) 定まった形容詞で表現できる character (Bingley は shallowness, Mr. Collins は 'self-importance' 等)
- 3) 容易に判断されたり分類されたりできない character。絶えずその性質が変化する。

るのである。Elizabeth は、“Yes, but intricate characters are the most amusing. They have at least that advantage.” (p. 42.) と述べている。intricate (complex) characters はその言動が複雑であるため、Elizabeth にとって興味がある。intricate character はAという人が見る見方と、B、Cが見る考え方がそれぞれ異なっている。昨日の彼と今日の彼とではまたく違っている。それゆえ彼の動きは弾力性に富み多様性があるため面白いのである。しかしその複雑性のために人間関係にくい違い、誤解が生まれ、互いに真の対話が遮られるために笑いがおこるのである。

(4)

それではどのようなところに笑いがあらわれているのであろうか。作品全体を通して感じられる笑いについて見てみよう。

(1)の(b)でこの作品の各章が起承転結よりなっていることを述べた。その起承転結の構成により笑いがおこるのである。Vol 3, Chapter 1でみると

(起) Pemberley Wood を Elizabeth と Gardiner 夫妻が訪問する。この時 Elizabeth は Darcy が翌日でなければ帰ってこないことを知っている。森を見ながら Elizabeth は自分が Darcy の申込みを拒絶しなかったら、今頃はここの mistress になっていたかもしれないのと思う。

(承) housekeeper である Mrs. Reynolds が Darcy のことをほめる。Elizabeth は Darcy に対して好意を持ち始める。

(転) Darcy が翌日でなければ帰ってこないはずなのに突然現れる。Elizabeth は申込みを拒絶した後なのでばつが悪く、恥ずかしくて仕方がない。

(結) Elizabeth は Darcy が留守だと思って訪問したことを説明し、Darcy は丁寧に Gardiner 夫妻にゆきとどいた世話をする。

以上のように Jane Austen は各章ごとに起承転結を繰り返す、「転」のところでは予想外の事件を起こすことによって、滑稽味を出しているのである。

次に読者が登場人物の知らないことを知っていることより生ずる笑いについてみていこう。この作品の中の登場人物にとっては hero と heroine は

Bingley と Jane である。皆の関心は Bingley と Jane の恋愛がどのようになるかに向けられている。しかし読者にとっての hero と heroine は Darcy と Elizabeth である。作品の登場人物からは Darcy と Elizabeth の恋愛の進展は隠されているが、読者の方はすべて知っていて、二人の婚約が整った時、登場人物は不意の出来事として驚くのである。しかし読者は登場人物が知らないことを知っているという優越感により笑うのである。これはラジオの「20の扉」や「なぞなぞ」で正解を陰の声として聴取者に話しかける方法とよく似ている。Jane Austen は巧まずして多数の読者の心をつかむ術を心得ていた。彼女は書簡集などからみると、自分の書いた物を後世に永く残そうという気持はあまり持っていなかったように思える。しかし彼女の平凡な題材を取り扱いつつも読者の心をつかみ、小説の終わりまでその気持をそらさず持ってゆく手法は(1)でも述べたようにテレビ、新聞、ラジオ等現代のマスコミにも通じる新しさを持っている。彼女の天成の笑いの手法は19世紀初頭のものであったが、今日にも通用する普遍性を持っている。

Bingley と Jane, Darcy と Elizabeth, この二組の恋愛ではっきりしていることは Darcy と Elizabeth の恋が complex love であるのに対して、Mr. Bingley と Jane との恋は simple love である。大の男である Bingley が Darcy の意のままに動かされていて、Jane に対する恋も Darcy の意志によって Jane を諦めたり、また申込みをしたりするところに笑いを感じるのである。Jane は世間を全て良く見ようとする性質で、そのため Miss Bingley に Jane の恋が邪魔されているのに盲目である。Jane にとって Elizabeth の助けは必要で、彼女によって恋が成就するのである。一方 Elizabeth と Darcy は、二人とも精神的に成熟していて、分別も判断力もあり、complex love をするのである。この Elizabeth, Darcy という精神的に大人の couple が Jane, Bingley という精神的に子供の couple を助け導いていくところに笑いが起るのである。

次に simple character と complex character との絡み合いによる面白さをみていこう。Mr. Bennet は irony に満ちた complex character であ

る。彼は妻の愚かさを十分に知っている。しかし退屈しのぎに妻の **poor nerves** をからかってユーモアを楽しんでいる。**Mrs. Bennet** は平凡な女性であるが、夫の **Mr. Bennet** との対話になると優れた **comedian** に変化するから面白いのである。ここでは **complex character** である **Mr. Bennet** が巧みに **simple character** である **Mrs. Bennet** からユーモアをひき出し **comedy** を作っている。

次に **vulgar** と **well-mannered** とを見ていこう。**Elizabeth** は当時の女性の嗜の「音楽、歌、絵画、ダンス、近代語の完全な知識、なおその他に歩き方とか、声の調子、話し方とか、言いなし(p. 39.)」を身につけた女性であった。しかし田舎に住んでいるため、上流好みの **Miss Bingley** は **Elizabeth** を **vulgar** だと偏見を持っていた。**Miss Bingley** から見れば悪天候の中を **Jane** の風邪の看病のために徒歩で駆けつけた **Elizabeth** の態度は当時の女性のエチケットに反する **vulgar** な態度であった。また **Darcy** と話す場合に **Miss Bingley** は **Darcy** の気に入られようとして諂っているのに、一方 **Elizabeth** は **Darcy** と同等に振舞い活発な **wit** に満ちた態度を取っている。**Mr. Bingley** との会話の時には **Mrs. Bennet** が見かねて、“**Lizzy**”,...“remember where you are, and do not run on in the wild manner that you are suffered to do at home.” (p. 42.) と注意を与えている。**Darcy** の妹の **Georgiana** も最初 **Darcy** と **Elizabeth** の会話を聞き、父のように尊敬している兄が **Elizabeth** にからかわれているのを聞いた時、驚くが、妻にはそのような態度を許しても良いのだと納得している。**Elizabeth** のように男性と同等に意見を交わす女性は新しい **type** の女性で当時の淑女から見れば **vulgar** であったかもしれない。しかしその **vulgar** が **well-mannered** な **Miss Bingley** や **Miss De Bourgh** をおいて、**Darcy** を惹きつけることになり、**Elizabeth** を玉の輿にさせることになったのだから皮肉なものである。

次に **unfeeling** と **feeling** とについて考えてみよう。**Lydia** は **Wickham** と駆落して家族の皆を心配させ、世間の評判を落したことに対して全然

後悔していない。作者は彼女のことを “high animal spirits,” (p. 45.) とよんでいるがそんな彼女と分別を備えた Elizabeth との会話は笑いを誘うものがある。

“And then when you go away, you may leave one or two of my sisters behind you; and I dare say I shall get husbands for them before the winter is over.”

“I thank you for my share of the favour,” said Elizabeth; “but I do not particularly like your way of getting husbands.” (p. 317.)

Elizabeth は Lydia の厚顔無恥な態度に決然と “I do not particularly like your way of getting husbands” と反駁している。Lydia の恥を恥とも思わぬ態度にまわりの常識ある人々が振まわされているところに笑いが生じる。

もうひとつの例は Mrs. Bennet の中年婦人にありがちな羞恥心を捨てさった図々しさと Elizabeth の結婚前の delicate な娘の気持とが対照的に示されているところがある。Vol 1. Chapter 18で Mrs. Bennet は Lady Lucas を相手に Jane と Bingley が結婚しそうだという予想をしきりに喋りまくり、この縁談による利益を数え上げている。Elizabeth は向いの席に Darcy が座っていて一部始終を聞いているので恥ずかしさに真赤になり母をとめようとするが、Mrs. Bennet は “What is Mr. Darcy to me, pray, that I should be afraid of him? I am sure we owe him no such particular civility as to be obliged to say nothing *he* may not like to hear.” (p. 99.) と答えている。しかし皮肉なことにはこの言葉は Lydia の駆落事件で Darcy が奔走したことにより、全く反対の意味となって Mrs. Bennet に帰ってくるのである。

次に Mr. Collins について考えてみると、彼は “mixture of servility and self-importance” である。彼は Lady Catherine の追従者であり、自分の身分の低さを Lady Catherine の寵愛をふりかざすことによって隠している。しかも彼は self-importance を身につけていて、Elizabeth に求

婚した時にそれが現れている。Elizabeth の拒絶を ‘according to the usual practice of elegant females’ (p. 108.) と解釈し、うぬぼれている。ところが Elizabeth が “...Do not consider me now as an elegant female intending to plague you, but as a rational creature speaking the truth from her heart.” (p. 109.) とはっきりと当時の女性としてはかなりきつい言葉で拒絶しても “You are uniformly charming!” (p. 109.) と叫ぶあたりは自尊心が強すぎて滑稽である。しかも Elizabeth の両親の authority によって許されることになれば、必ず受入れられると彼は信じている。Mr. Collins は Lady Catherine の名をふりかざしたり、Elizabeth に結婚申込みをする時は Elizabeth の両親の authority を用いたりして、たえず誰かの権力をかさきいていばっているところに笑いがあがる。

Lady Catherine は家族や地位に対して誇を持ち優越感を持っている。彼女は Mr. Collins という追従者を持ち、自尊心を満足させているところが面白い。しかし彼女の家族や地位の誇も自尊心も Elizabeth と Darcy の恋愛の前には脆くも崩れ去ってゆくところが笑いをおこすのである。彼女は二人の結婚に反対して、 “Because honour, decorum, prudence, nay, interest, forbid it...” (p. 355.) と Elizabeth に言うが、しかしそれが逆に Elizabeth に Darcy を愛しているという自覚を目ざまさせ、Darcy にも Elizabeth が二度も結婚を拒絶しないだろうという確信を与え、結婚の申込みを Elizabeth にするのである。Lady Catherine は名誉、家柄、地位に対して自尊心を持ち優越感を持っているが、Darcy の権威や富、Elizabeth の知性と自主独立の精神の前にその自尊心がくずれてゆくところに滑稽味を感じられる。しかし Darcy と Elizabeth が Lady Catherine の権力に勝ちえたのは二人が complex character であり、二人の愛が Jane や Bingley の愛と違って成熟した大人の心を持った愛であるからである。

人間関係においてはさまざまな誤解により真実を見誤り、そこに笑いが生じることもある。Elizabeth は Wickham の美貌と巧みな弁舌に惑わされて、Darcy が Wickham を迫害したと誤解し、そのため Darcy の最初の

結婚申込みを断るのである。しかし Darcy の手紙により事実は逆で Wickham が Darcy の恩顧を裏切ったことがわかりそこに笑いが生じるのである。Wickham の口先に乗せられて Elizabeth が騙されたことによる笑いである。人の言葉と実際の行動とのくい違いによりおこる笑いである。

Darcy は判断力と知性の備わった人物であるが、その彼でも失敗はする。Jane の Bingley に対する顔つきや態度から見て、彼女が Bingley を愛していないと判断し、Bingley に Jane のことを諦めさせるのである。しかし実際は Jane は Bingley を深く愛していたので、Jane は失恋の苦しみに悩むのであった。これは Darcy が自分の判断力を過信し、Jane の reserved で自分の感情を外に表さないという性質を Darcy が知らないためにおこった間違いである。外面の態度は時々人を欺くものであることよりおこる喜劇である。

次に blindness, folly よりおこる笑いについてみてみよう。Jane Austen の小説においては世間知らずの若い女性が社会の人々との交渉により真実にめざめて行く過程が描かれている。Emma はそれをよく表しているが、Elizabeth もやはり Emma と同様に世間を知らず、未熟な女性であり、そのため真実に盲目である。前に Wickham の巧みな弁舌により Elizabeth が騙されたことを述べたがそれは Elizabeth の方にも落度があったはずである。彼女は自分の識別力を自負し、Jane の 'generous candour'¹⁾ を軽蔑していた。しかしその結果 Darcy にも Wickham にも盲目であったのである。"But vanity, not love, has been my folly." (p. 208.) と後悔している。彼女は Wickham の言うことのみを聞いて判断し、Darcy の言うことを聞かなかった。Darcy の言うことを聞かなかったことは片手落であった。"...I have courted prepossession and ignorance, and driven reason

1) frankness (率直さ), open-mindedness (公平無私)を意味するが、この小説では 'kindliness' を含む事柄であり、他人に対して好意的に見ようとする、他人の言葉や行動を最善に解釈しようとする性質である。

Elizabeth の言い方によると、'to take the good of every body's character and make it still better, and say nothing of the bad.' (pp. 14-5.)

away....” (p. 208.) と Elizabeth は深く反省している。reason を追いはらったところに prepossession と ignorance が生まれ、さらに folly へと人を追いやるのである。Jane Austen は女性の folly を描いた作家だと言われている。Emma は narcissism と何でも自分の思いのままにできすぎる環境が彼女を盲目にし folly に駆りたてたが、Elizabeth では自分の判断力に対する pride が folly に追いやった。そこに自分の能力、才能を自負した結果の愚行がみられ、笑いを誘うのである。

Elizabeth は Jane とくらべると大人であるがしかし結婚という問題になると Charlotte の方が大人である。Emma は親友の Charlotte が ‘neither sensible, nor agreeable’ な Mr. Collins と結婚した時、非常に驚いた。Elizabeth は Mr. Collins の人柄だけを考慮して、彼との結婚は望ましくないと考えている。しかし Charlotte は Mr. Collins の Elizabeth が指摘するような欠点 (snob, self-importance) を知りながら、その欠点に目をつむって、自分自身を Mr. Collins のような simple character に変えることによって彼と結婚したのである。それは彼女が大家族の一員であること、教育はあるが財産の少ない若い婦人にとって、結婚がたとえ幸福を与えたと確信できなくても、欠乏からの最も快い予防法であったからである。Charlotte の “I am not romantic you know. I never was. I ask only a comfortable home;” (p. 125.) という言葉に彼女の結婚に対する智恵が窺われるのである。ここでは Elizabeth の romantic な考え方と Charlotte の当時の社会における女性の経済的安定を考えた考え方が対照的で笑いを生んでいるのである。

次に first impression による誤解からくる笑いについて見てみよう。Bingley が Elizabeth をダンスに誘うようにと Darcy に頼んだのに対して、Darcy は、“She is tolerable; but not handsome enough to tempt me;...” (p. 12.) と言ったのを Elizabeth は立聞きし、皆にその事を話した。Darcy はまさか Elizabeth 自身が聞いていようとは夢にも思いはしなかったのに彼女が聞いていたことは滑稽である。しかし二人の態度を考えて

みると、**first impression** で二人は互いに無関心でおれない何かを感じたと思われる。しかし **Darcy** は **pride** に満ち、また男性的な男性によくありがちなことだが女性に対する気恥しさが作用して **Bingley** のように素直に女性を讃美することができない。そのため **Elizabeth** に惹かれていながら、**Elizabeth** に **prejudice** を与えるような事を言ったのではないだろうか。一方 **Elizabeth** も **Darcy** に何か惹かれるものがあって **Darcy** の言った事を皆にふれまわったのではないだろうか。二人は **first impression** で一目惚れをしておりながら、**pride, prejudice** という強い甲冑で身を固め、お互いに真の対話ができずにさまざまな誤解を抱いて暗中模索した。しかしその **pride, prejudice** という甲冑を脱いだところに真の対話が生まれ、二人は互いに愛を確認するようになったのである。**Elizabeth** と **Darcy** が互いに愛しながら、**pride, prejudice** により反撥しあっていくところに笑いが生れるのである。

次に Vol 3. Chapter 12で **Elizabeth** と **Darcy** が互いに話し合いたいという意志がありながら、場がさえぎられるところに笑いがある。**Darcy** が **Lydia** の墮落事件で尽力をしてくれた後、**Elizabeth** は **Darcy** への偏見も解け、愛情を感じて **Darcy** と話し合いたいと思ひ、**Darcy** の方も **Elizabeth** と話し合いたいと思っている。ところが **Elizabeth** が **coffee** を注いでいる **table** の周囲に婦人達がぎっしりと詰め寄せ、紳士を割りこませないようにしたので、**Darcy** は **Elizabeth** の傍に近寄れなかった。次は **Elizabeth** の母がカルタの相手をかき集めていて、強引に **Darcy** もその仲間になされ、**Elizabeth** のところに来れなかった。このような方法はメロドラマの手法の **hero** と **heroine** とのすれ違いによく用いられているが、ここでは笑いを誘うのである。

(結 論)

今まで「起承転結によりおこる笑い」「読者が登場人物の知らないことを知っていることよりおこる笑い」「精神的に成熟した恋人達 (**Darcy** と

Elizabeth) が精神的に未熟な恋人達 (Bingley と Jane) を導いていくことによりおこる笑い」「vulgar が well-mannered を凌ぐことによりおこる笑い」「unfeeling と feeling との対照による笑い」「servility と self-importance により生ずる笑い」「名誉、地位を誇ることによりおこる笑い」「言葉と行動のくい違いによる笑い」「外的態度と真情とのくい違いによる笑い」「blindness, folly による笑い」「first impression から生ずる笑い」「真の対話が妨げられることによる笑い」を見てきた。

この作品の笑いについて考えてみる前に作者のどのような雰囲気、感情のもとにこの作品が書かれたのか見て見よう。この作品は最初 *First Impression* という題で書かれ、1796年10月から1797年8月に執筆され、それから1813年に出版されている。出版された作品を彼女は ‘my own darling child¹⁾’ と呼んでいる。40近くなった Austen から見ればこの作品は若いおてんば時代の懐しい産物であったのだろう。*First Impression* を書いた時は21才の時であった。夢多き乙女にとってはすべてが明るく楽しかったにちがいない。その明るさ、陽気さは作品全体に流れている。しかしただ明るかったこの作品に人生の真実の意義を与え、ぴりっとした風刺を利かせたのは出版までに16年の才力が流れたことであった。20代の初めからはほぼ40近くまでの年月は女性にとっては一生の中で重大な時期である。その間にはさまざまな恋愛、結婚などの悩みを経験し、upper-middle class のお嬢さんであった Jane Austen にもさまざまな人生の喜怒哀楽が潮の満干のように到来しては退いていったであろう。しかしその16年間の人生経験はただ明るかった *First Impression* にさまざまな陰影を与え、*Pride and Prejudice* という傑作にまで高めたと考えられるのである。それゆえこの作品における笑いも *First Impression* 執筆当時の明るい笑いをさらに深めた人生経験のにじみ出た笑いへと変化したと思われるのである。

彼女の笑いについて考える前に、Austen の作品は範囲が限定されている

1) J. E. Austen-Leigh, R. W. Chapman ed.
Memoir of Jane Austen, (Oxford, 1963), p. 104.

ことについて見てみよう。**Austen** の舞台は「田舎の 3, 4 家族」¹⁾に限られ、**English Country Gentry** が中心であった。しかも **Austen** が女性であるという限定もあった。この限定のもとで彼女が描いたのは人間の行動、心理の変化を描く方法であった。彼女はこの手法を **Richardson** や **Fielding** から学んだ。

笑いをおこすのは **Smollett** のように次から次へと出来事をたたみ重ねて変化を与えることによって読者の興味をひく方法もある。しかし **Austen** の作品では事件といえは **Lydia** の墮落と **Jane** の風邪ぐらいで事件らしい事件はおこらず平凡なありふれた事柄ばかりなので、**Smollett** のような手法は用いなかった。それでは変化を起すものは何であろうか。それは人間の心の動きを会話を中心として話を進め **Narrative Art** を用いた。そしてその会話とは(1)で述べたように一見つまらないように見える日常会話から **James** 流に読者にさまざまな解釈の多様性を与え、どこに笑いが含まれているかは読者の想像にまかせた。さらに登場人物は **simple character** と **complex character** とに分れ、**complex character** は接する人によってさまざまに印象がちがいが、変化に富んだものであり、随所に笑いをひきおこした。

Jane Austen が女性であるという限界については、**Shakespeare** や **Laurence Sterne** の笑いにみるような **sexual** な笑いを避けて、若い結婚前の女性が顔を赤らめないで話せるような上品な知的な笑いへと向った。それは **reflective laughter** であり、精神的、知的な活動を必要とする笑いであり、人間の心理の変化を描く手法と合致した。

それでは **Jane Austen** の笑いとは何か。それは二通りの笑いが考えられるのである。ひとつは彼女の天賦の、巧まずしてにじみ出る笑いであり、もうひとつは作者が作品で述べようと意図した笑いとはに分れるのである。

最初に彼女の天賦の、巧まずしてにじみ出る笑いについて見てみよう。**Jane Austen** は天賦の **comedian** であった。彼女の人柄が笑いを好む性格

1) R. W. Chapman (ed) : *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others* (Oxford U.P., 1932), p. 401.

であり、平凡な日常生活の中から人間の勿体ぶりや上品ぶり等から鋭い洞察力で笑いを見つけ出す感受性があった。Austen の作品は娯楽作品としても面白いものがあった。書簡集などからみると、Jane Austen は読者を楽しませようなどとは思わなかったであろう。しかし彼女は天賦の大衆を楽しませる手法を身につけていた。それは(1)でも述べたように私達に平凡な日常茶飯事の題材をとり扱いながら、各章ごとに起承転結が行なわれ、各通を通して最後まで一貫したテーマを持ち、好奇心をそそり、女性を活躍させたことである。また作中人物に内証で秘密を知らせてくれ、知らない秘密を知っているという優越感を与えてくれた。これらの手法は現代の新聞、ラジオ、テレビ等マスコミにも通じる新しさを持つ方法である。

次に Jane Austen の意図した笑いについて考えてみよう。

この作品には恋愛と結婚が中心となっている。それでは Jane Austen はどのような結婚を理想としたために笑いがおこるのであろうか。結婚観の場合、‘It was wrong to marry for money, but it was silly to marry without it.’ という¹⁾ D. Cecil の説が最もよく知られている。Austen は小説において、love marriage を理想としたが、経済的安定も必要なものであった。その上、階級、家柄も大事な条件であった。Elizabeth は Lady Catherine から Darcy との婚約を家柄が釣合わないからしないようにと言われた。(4)のところで Charlotte を賢明だと言ったが、それは結婚が彼女にとって生活の安定の上で課せられたものである場合、与えられた候補者の中では Mr. Collins が一番適当であると思われたからである。しかし、もっと広い候補者の中から Charlotte が夫を選ぶ chance があったなら、‘It was wrong to marry for money’ と言って笑ったかも知れない。Lydia と Wickham の墮落については sexual love だけで結びつき、生活するすべについてはまるで無知であるから ‘It was silly to marry without it.’ と笑われるであろう。しかし作者は愛、財産、階級の他に大事なものがあつたことを私達

1) D. Cecil, “Jane Austen”, in *Poets and Story-Tellers*, (Constable, London, 1960), p. 116.

に教えてくれた。それは精神的にも成熟した大人であることである。Darcy と Elizabeth が Jane と Bingley を思いのままに動かすところに笑いを感じた。しかし作者は笑いを通して Jane と Bingley のような精神的に未熟な人間ではいけないということを教えてくれるのである。笑いを通して Austen は moral を教えてくれるのである。

Miss Bingley は女性としての才芸を身につけた well-mannered な淑女である。Elizabeth も女性としての才芸を身につけているが、当時の女性のエチケツトに反するような悪天候の中を徒歩でひとり歩きをしたり、男性と同等に意見を述べる vulgar な女性である。どうしてその vulgar な女性が well-mannered な女性をさしおいて Darcy と結婚したのであろうか。Austen は Miss Bingley にみられるような表面上だけの勿体ぶった作法よりも人間の本質的な精神の作法を理想としたからである。それは Elizabeth に見られるような生々とした、wit に富んだ、自主独立の精神であり、姉 Jane の病気を心配して体裁をかまわず駆けつけた優しい愛情であった。それゆえ Austen は Miss Bingley の上品ぶった態度を笑ったのである。

次に servility と self-importance による笑いを見ていこう。この笑いには Jane Austen が人間が不完全で弱い、欠点に満ちた存在であることを充分に知っていたことより生ずる笑いである。人間は平凡な不完全な存在であるのに、しかし生存競争の激しい社会生活において、少しでも自分を他より優れて見せようとして苦心する。Mr. Collins は Lady Catherine という立派な家柄の婦人を自分の盾として、たえず彼女の名をかざすことによって自分の弱さを隠そうとした。一方 Lady Catherine は家柄、名誉、体面をふりかざして Darcy と Elizabeth の結婚を妨害しようとした。しかし Darcy の富と権力と知識や Elizabeth の自主独立の精神のために破れたのであった。Mr. Collins にしろ、Lady Catherine にしろ、少しでも自分を勿体ぶって偉く見せようとしたが、墨染めの衣の下から隠したはずの鎧がちらりとみえるところに笑いがおこるのである。人間が自分の不完全さ、欠点を隠そうとして隠せないところに笑いがあった。Jane Austen が完全な人間を好

まなかつたことも一因である。

対人関係においては、第一印象だけで人を判断したり、外面的な事柄だけで判断し、そこから笑いがおこることもある。**Elizabeth** と **Darcy** は **first impression** で反撥しあうものを感じた。これが **Elizabeth** の **prejudice** となり、**Darcy** の **pride** と衝突し、この作品のテーマとなった。また **Darcy** は **Jane** の **reserved** な外見だけで **Bingley** を愛していないと判断してしまった。一方 **Elizabeth** は **Wickham** の巧みな弁舌にだまされて、**Darcy** を誤解した。このように対人関係においてはさまざまな思い違い、意見の相違、誤解が多いものである。それゆえ、自分自身が **round** になり、古い固定観念で人を判断せずに、たえず印象を改め、判断を新にしてゆくことによって、まちがった見解を少しずつ修正してゆくことが望ましいと作者は私達に教えている。

Elizabeth の **blindness** と **folly** による笑いについて考えてみると彼女は **Wickham** の言うことだけを聞き、**Darcy** の言うことは聞かずに自分の判断力を自負して **Darcy** を悪いときめてしまった。彼女の態度は **reason** を追い払って、先入観念と無知に従った。その結果、**folly** に陥ったのである。彼女は判断力を過信せずにもっと謙虚になるべきであったと作者は注意しているのである。

今まで **Jane Austen** の笑いをみてきた。それは **Elizabeth** の **wit** に富んだ生々とした明るさ、**Mr. Bennet** の鋭い **irony** 等、作品全体に笑いをひき起し、読者を楽しませてくれた。しかし、その笑いの奥には **Austen** が立っていて、楽しい笑いでくرمえた人生の教訓のひとつひとつを私達に教えてくれたのである。**Austen** は笑いの仮面をかぶって多数の読者を彼女の作品に惹きつけながら、実は私達に説教していたのである。